

Title	修験道組織の形成と地域社会
Author(s)	長谷川, 賢二
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/61399
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏 名 （長谷川 賢二）	
論文題名	修験道組織の形成と地域社会
論文内容の要旨	
<p>本論文は、中世における熊野三山検校・聖護院門跡を中核とする修験道組織（本山派）の形成過程、そして、四国東部の阿波国における事例を中心として、修験道の末端にかかわる山伏や霊山の地域的な実態について検討するものである。修験道は、山伏（史料用語としては「山臥」が一般的であるが、ここでは、便宜的に「山伏」と表記する）が山岳で修行し、呪力を獲得すること、その能力を祈祷などの対社会的活動において行使することを特色とする宗教である。日本独特の宗教とされたり、原始古代以来のものとなされたりすることがあるが、本論文では、史料から13世紀末～14世紀、顕密仏教の構成要素として修験道が「成立」することが知られるという点を重視し、修験道を中世の顕密仏教・寺院のあり方とみる立場をとる。したがって、修験道を通じて中世における寺院や宗教者のあり方の一端を明らかにすることにもつながると考える。</p> <p>ところで、修験道をめぐる歴史的研究は戦前以来の蓄積があり、とくに和歌森太郎『修験道史研究』（1943年）が、本格的な研究の端緒を開いたものとして著名である。修験道を中世的宗教と説き、後に続く研究とは異質な歴史性の重視がうかがえるものの、山伏の遍歴から定着へという推移イメージや、天台系の聖護院を核とする本山派、真言系の醍醐寺三寶院を核とする当山派の成立に修験道展開の帰着点を求める構図など、後の研究の枠組みとなった議論については、実証よりも予定調和的な立論がなされていた。これ以後の修験道史研究は、民俗学的研究の卓越と歴史学的な探求の後退に特徴づけられる。</p> <p>その一方、日本中世史研究においては、20世紀後半、黒田俊雄による顕密体制論・中世寺社勢力論の提起の影響を受けて中世宗教史・寺院史研究が急速に進展したことが注目されるが、この潮流においては修験道への関心は乏しかった。研究のいっそうの進展を図るため、修験道に関心を向ける意義は十分にあると思われる。</p> <p>本論文は、こうした研究史理解を前提とし、従来の修験道史研究の問題点の克服と中世宗教史・寺院史研究の深化を意図して進めてきた研究成果を集約したものである。本文は2部全9章で構成しており、次のようにまとめることができる。</p> <p>第1部「熊野三山検校・聖護院門跡と熊野先達」では、中世後期における聖護院門跡による熊野三山検校職の相承の背景や熊野先達・山伏の組織化、当該期の在地寺院における先達・山伏の存在形態、自律的ネットワークの形成と意義を取り上げることで、修験道本山派の初期的な組織の形成過程を、門跡寺院とその周辺、あるいは熊野三山という「上」と、在地寺院や先達・山伏という「下」の双方の動向・接点を探る。</p> <p>第1章「聖護院門跡による熊野三山検校職の相承と熊野先達」は、聖護院門跡による三山検校職の相承や熊野先達・山伏の組織化についてとらえ、本山派の形成について考えるものである。しばしば、聖護院門跡は平安時代以来、山伏と関係していたかのように説かれることがあるが、実際はそうではなく、中世後期における室町殿権力とのかかわりを中心とする、政治・宗教の動向と深くかかわるものであることを指摘する。</p> <p>第2章「熊野先達をめぐり支配と自律」は、修験道組織の末端に編成される熊野先達・山伏について、熊野及び三山検校・聖護院門跡との関係の推移を概観するものである。中世前期には、先達は熊野が帰属先と認識され、その指揮下に入っていた。三山検校が先達補任権を確保した例もみられるが、限定的なものと思われる。しかし、熊野別当の廃絶など、熊野の機構変容に伴い、中世後期には先達・山伏の自律性が高まり、必要があれば三山検校である聖護院門跡に服属した。先達・山伏は支配の客体にとどまるのではなく、自律的な結合と意思決定があったと述べる。</p> <p>第3章「熊野三山奉行の成立と展開」は、熊野三山検校のもとに置かれた三山奉行について、三山検校職の相承を含む、天台寺門派の動向と関連させつつ検討する。三山奉行・若王子別当・乗々院主の三位一体的関係が、南北朝時代に足利尊氏によってつくられ、以後、定着したとされる通説の全面的な見直しを行うものである。三山奉行は14世</p>	

紀、熊野の情勢変化への対応として、三山檢校によって置かれたとみられること、先の三位一体的関係は、寺門派内部の再編と連動して成立し、若王子僧正を中心とする一門の様相をもって運用される関係であったことなどを示す。

第4章「中世後期における寺院秩序と修験道」は、近江国伊吹山観音寺（大原観音寺）を主たる事例とし、摂津国勝尾寺などの例を援用しつつ、寺内集団としての山伏のあり方、山伏の地域的な自律的ネットワークの形成、三山檢校・聖護院門跡との関係について検討するものである。在地寺院をめぐる情勢を基軸にしなが、修験道組織が既存の寺内秩序や本末関係に抵触せずに間隙を縫って形成され始めた様相を示している。

第2部「山伏と山岳霊場の地域的展開」では、主として南北朝時代以降の阿波国における事例をもとに、在地レベルでの熊野先達・山伏や霊山の具体相をとらえる。熊野信仰に関連している諸問題を扱うことから、第1部とも関連している。しかし、取り上げる事例は、山伏が三山檢校・聖護院門跡と結びつくものではなかったり、関係があったとしても、単純に天台系という理解ではとらえられないものであったりする。

第1章「阿波国吉野川流域における山伏集団の展開」では、阿波国麻殖郡のうち、現在の徳島県吉野川市鴨島町内に拠点をもった熊野先達である十川先達の基盤（檀那把握の実態）や先達間の調整システムを検討する。中世には本山派に編成された徴証がなく、在地レベルの自生的な先達・山伏の結合組織が16世紀末まで展開したと述べる。1990年代の地域社会論研究で説かれた、聖・修験者の活動が地域の秩序形成・維持に役割を果たしたとする視点を踏まえ、先達・山伏の活動における「地域」の意味、先達・山伏らにとっての秩序のあり方について考えるものでもある。

第2章「阿波国の山伏集団と天正の法華騒動」は、16世紀後半、三好長治による阿波国内に対する日蓮宗への強制改宗政策に端を発して、日蓮宗と真言宗等諸宗派が対立した「天正の法華騒動」において山伏の蜂起があったとされるが、その際、大滝山系真言修験と忌部修験の二系列の山伏集団が対抗したとする先行研究と論拠とされる史料を検討し、当該期の阿波国における山伏集団の状況について論じる。法華騒動における山伏蜂起の可能性はあるものの、二系列集団説は成り立たないことを明らかにする。

第3章「山岳霊場・阿波国高越寺の展開」は、中世阿波国における代表的な霊山として知られている高越山に成立した高越寺について、修験道の「成立」時期の検討を踏まえながら、霊場としての展開を歴史的に把握するものである。12世紀には弘法大師信仰霊場であり、13～14世紀以降、確実なのは15～16世紀、修験道の霊場として定着したと考える。阿波では古い大師信仰の霊場でありながら、大師信仰を基盤に成立したといわれる四国八十八か所霊場に含まれていない理由も考え、四国遍路成立史研究へのリンクも意図する。

第4章「阿波国における三宝院流熊野長床衆の痕跡とその意義」は、14世紀に書写された徳島県神山町勸善寺所蔵大般若経巻二〇八奥書にみられる三宝院流熊野長床衆に注目し、この奥書について修験道史と地域史の両面から検討し、史料的意義を明らかにする。前者については、長床衆にとっての「三宝院流」の意味について意を払い、天台寺門派と真言宗の狭間にあったとみられる山伏のあり方、真言系の修験道当山派形成史との関係について注目する。後者については、中世史料が極めて少ない地域の信仰と交通・交流の実態をうかがわせるものとして注目する。

第5章「熊野信仰と天台宗・真言宗」は、前章で論じた修験道史にかかわる論点を発展させるものである。前章の事例や備前国児島山伏、讃岐国の大般若経写経僧などに触れながら、熊野信仰と宗派の関係を具体的にとらえる。熊野三山檢校職が概ね天台寺門派で相承されたことから、熊野信仰を寺門派と結びつけて理解しがちであるが、宗派性の曖昧さを認識する必要があることを指摘する。

以上の各章で取り上げたのは、熊野信仰にかかわる事例という点では共通している。また、第1部で検討した、天台寺門派内における修験道本山派の形成は重要な問題である。同時に、第2部で示したように、先達・山伏がすべからずそこに組み込まれるという図式ではないこともまた、重要である。先達・山伏が留保する「選択肢」があるし、宗派的にも多様な展開コースがあり得たのである。すなわち、本論文の表題である「修験道組織の形成と地域社会」とは、熊野三山檢校・聖護院門跡とその周辺、熊野三山という「上部」から、熊野先達・山伏や在地の霊場寺院といった「下部」までを貫通した組織形成をいうのではない。組織形成の進行の反面、先達・山伏が活動した地域社会に内在して動向を観察するならば、修験道のあり方には幅広い「可能性」があったことに着目すべきなのである。今後の課題はその延長上にある。先述のとおり、和歌森太郎以来、修験道史研究においては、本山派・当山派に帰着点を求めてきた。しかし、そうした枠組みからは外れた実態（例えば、中世の真言宗・東寺における入峰修行があり、しかも天台寺門派との関係があったという事実）に注目しなければならない。その先に、中世の国家・社会と宗教の連関の中に修験道を位置づけることができるようになるであろう。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (長谷川 賢二)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学 教授 川合 康
	副 査 大阪大学 教授 村田 路人
	副 査 大阪大学 准教授 市 大樹
	副 査 京都学園大学 教授 平 雅行
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：修験道組織の形成と地域社会

学位申請者 長谷川 賢二

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 川合 康
副査 大阪大学教授 村田 路人
副査 大阪大学准教授 市 大樹
副査 京都学園大学教授 平 雅行

【論文内容の要旨】

本論文は、中世における熊野三山検校・聖護院門跡を中核とする修験道組織（本山派）の形成過程、ならびに、阿波国における事例を中心として、修験道の末端にかかわる山伏や霊山の地域的な実態について検討するものである。修験道は、これまで日本独特の宗教とされたり、原始古代以来のものとしてきたが、本論文は、13世紀末から14世紀に顕密仏教の構成要素の一つとして修験道が成立したことを重視し、修験道の検討を通じて中世における寺院や宗教者のあり方をとらえ直すことを目的とする。本文は、序章・第1部（全4章）・第2部（全5章）・終章から構成され、総頁数はA5判320頁であり、400字詰め原稿にして約750枚である。

序章では、戦前からの修験道史研究の研究史を総括し、本論文の主要な課題を提起する。第1部「熊野三山検校・聖護院門跡と熊野先達」は、中世後期における聖護院門跡による熊野三山検校職の相承の背景や熊野先達・山伏の組織化、当該期の在地寺院における先達・山伏の存在形態、自律的ネットワークの形成と意義などを追究する。第1章では、聖護院門跡による三山検校職の相承や熊野先達・山伏の組織化について検討し、本山派の形成が中世後期の室町殿権力と密接に関わっていたことを指摘した。第2章では、修験道組織の末端に編成される熊野先達・山伏について、熊野及び三山検校・聖護院門跡との関係の推移を分析し、中世前期には先達は熊野が帰属先と認識され、その指揮下に入っていたが、中世後期には先達・山伏の自律性が高まり、自らの意思で三山検校である聖護院門跡に服属したことを論じた。第3章では、熊野三山検校のもとに置かれた三山奉行について検討し、14世紀の熊野の情勢変化への対応として三山検校によって置かれたものであり、熊野三山奉行と乗々院・若王子の一体化は、寺門派内部の再編と連動していたことを明らかにした。第4章では、近江国伊吹山観音寺を中心に、寺内集団としての山伏のあり方や、山伏の地域的な自律的ネットワークの形成、三山検校・聖護院門跡との関係について総合的に論じ、修験道組織が既存の寺内秩序や本末関係に抵触せずに展開する様相を解明した。

第2部「山伏と山岳霊場の地域的展開」では、主として南北朝時代以降の阿波国における事例をもとに、在地レベルでの熊野先達・山伏や霊山の具体相を明らかにする。第1章では、阿波国麻殖郡の熊野先達である十川先達の基盤や先達間の調整システムを検討し、中世に本山派に編成された徴証がなく、在地レベルの自生的な先達・山伏の結合組織が16世紀末まで展開したことを指摘した。第2章では、16世紀後半の「天正の法華騒動」におい

て、大滝山系真言修験と忌部修験の二系列の山伏集団が対抗したとする先行研究を批判し、当該期の阿波国の山伏集団の実態を論じた。第3章では、中世阿波国の代表的な霊山である高越山に成立した高越寺が、12世紀の弘法大師信仰霊場から、中世後期には修験道の霊場として定着していくことを明らかにした。第4章では、14世紀に書写された徳島県神山町勸善寺所蔵大般若経奥書にみられる三宝院流熊野長床衆に注目し、天台寺門派と真言宗の狭間にあった山伏のあり方を指摘した。第5章では、阿波国熊野長床衆や備前国児島山伏、讃岐国大般若経写経僧などに触れながら、熊野信仰をただちに寺門派に結びつけて理解するのではなく、宗派性の曖昧さを認識する必要があることを指摘した。終章では、本論文の全体を総括するとともに、今後の課題として、修験道のあり方には本山派・当山派だけではなく、幅広い「可能性」があったことに着目すべきであることを提起する。

【論文審査の結果の要旨】

修験の歴史学的研究は、実質的に和歌森太郎『修験道史研究』（1943年）から始まった。ここで和歌森は、古代から近世初頭にいたる、修験道の成立・展開過程について基本的な枠組みを提示した。しかしその後の研究は、民俗学的アプローチが中心となったため、歴史学的な研究の深化は充分でなかった。1975年に黒田俊雄が顕密体制論・寺社勢力論を提起すると、寺院史研究が一挙に花開き、そのなかで、修験道を顕密仏教・寺社勢力の一環として捉え直す研究が相次ぐようになる。申請者は、そうした視角からの研究を牽引してきた代表的研究者である。

本論文の第一の成果は、修験道本山派の歴史的な成立過程を実証的に明らかにしたことである。特に、近江国伊吹山観音寺を主な素材としながら、鎌倉末・南北朝時代における地域の山伏の実態を鮮やかに解明しており、そのなかで、①地域の顕密寺院においては、山伏は下位の寺僧と位置づけられていたが、他方で彼らは、所属寺院や本寺の枠を超えて、近隣寺院の山伏と結合しており、さらにそれは一国単位での山伏の組織化に至った、②山伏の地域組織は、山伏をめぐる相論を自力で解決していたが、守護勢力等の介入に対抗するため、熊野三山検校に頼るようになり、これが聖護院門跡による山伏編成の歴史的前提となった、ことを明らかにした。

このほか、聖護院門跡が熊野三山検校を独占するようになった背景に、道意・満意が室町殿の祈禱で中核的な役割を果たしていた事実の指摘や、熊野三山奉行と乗々院・若王子が一体化する歴史過程の検討なども、貴重な成果といえるだろう。

本論文の第二の成果は、史料を博搜・精査することによって、中世後期阿波国における山伏や霊山の具体相を明らかにしたことである。そして、①16世紀中葉には阿波においても、宗派や本末関係を超越した一国規模の山伏の結合組織が形成されており、地域においては、宗派の枠組みにとらわれない動きがみえること、②中世阿波の修験道史を大滝山系真言修験と忌部修験の二派の対立・展開と捉える先行学説はその史料的根拠が崩壊していること、③中世阿波の代表的霊山である高越山高越寺が、弘法大師信仰の霊場から修験道の霊場へと展開していったこと等を、明らかにしている。

もちろん、残された課題も多い。史料的な制約があるとはいえ、熊野三山衆徒を本格的にとりあげなかったことが、熊野三山の支配体制の構造的変化を見通すことを困難にしたし、熊野三山検校や別当等の分析についてもなお課題を残している。しかし丹念な史料収集と厳密な分析にもとづいて地域社会における修験道の実態を解明した本論文は、修験道史や仏教史はもちろんのこと、中世後期の地域史研究への重要な貢献として、研究史に残るであろう。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。